

## 病める人間学—哲学の誘い

岡田 雅 勝

### 1 序章人間の何かへの問い

人間への問い 実に人間は複雑な生き物である。「人間への問い」、それは私たち人間にとって、誰もが関心のある問いである。人間とは、非常に複雑な姿をして、一見捉えがたいようでありながら、それでも私たちは〈人間とは何か〉という問いを何度も過去から尋ねてきたし、その問いを尋ねざるを得なかったし、それにいろいろと答えてきたのであった。

その結果の一つが、人間を理性的存在として規定している。それは「人間は考える」ことができるということからきている。人間は意識をもち、たえず自己を高めようとして生きているからだと答えてきた。この答えは西欧的である。どうやら西欧では「人間とは」という問いに理性的であると答えてきたのであった。たとえば、ここでマックス・シェラーに従って尋ねるとしよう。「人間は否定(Negation)を捉え、生産的に設計できる生き物である」(マックス・シェラー)からだと答えてきたし、人間は否(Nein)を言えるということは他の動物に言えないことであり、それは人間が考えることができるからだと答えてきた。さらに人間は「生命の禁欲者である。それゆえ、あらゆる現実に対する永遠の抗議者である」(同)と答えてきた。生命の禁欲者というのは、現実の自分に逆らって禁欲していくという音味で、人間だけが為し得る行為である。これもやはり人間が考えることができる生き物であることからきている。シェラーに従えば、人間というのは、「いま、ここにあること(Jetzt—hier—sosein)の制限を破り、とりまく現実を超えようと望んでいる」(同)と言える存在である。シェラーはこうしたことを含めて人間が理性的存在であると言っている。私たちはシェラーに従って人間とは何かと尋ねてきたが、それはシェラーに特有な人間理解ではない。この答えには、西欧の伝統が担われている。つまり西欧的にいって、人間とは「考える」存在である、つまり理性的存在であるという伝統に従っている。西欧人の人間が理性的存在であるというこの答えは、人間のありべき姿を示している。

理性的存在と言っても人間は何も完全に理性的存在であるわけではない。むしろ人間は不完全にしか理性的存在でしかないのだ。人間は考える存在であるが、考えることにさまざまに限界がある。それだからこそ人間はあれこれと迷い、悔み、気苦労の多い生を送っているのだ。人間は惑いながら生きている。人間の行為はどれ一つ取り上げても何かと惑い、何かとためらいが多い存在である。それだから、人間こそあらゆる意味において欠けている存在と言える。理性的だと言っておきながら人間はなかなか理性的にならない。また、人間を「笑う存在」だと規定する仕方もあるが、そう規定しても、なにも人間が笑っているばかりではない。悲しんだり、悔やんだり、泣いたりする等々のこ

とをする存在でもある。さらに人間を「遊ぶ存在」だと言って、人間の特性を遊びに求めている。それが人間の全体的な定義とはならない。

無論これらの定義は人間の特徴を述べたものにすぎない。それは西欧で取られていた方法で、種差から導き出したものである。種差から導き出したというのは、人間以外の種との違いを見出し、それを人間の定義とした。人間が全体的に規定されないという面を考慮すると、「人間の何か」が答えられない面があるが、いずれにしても、人間は何をするにしても欠けているのだ。何をするにしても、曖昧な側面がある。何も他の動物や植物が欠けていないと言っていない。欠けている点がいっぱいある。しかし全体として見ると、欠けているが、それでも何か充足している。人間はこれに対して何事にせよ、充足ができず、常に充足しようと努めている。人間は充足しようと努めているが、人間は自ら決して充足することを知らない。

これは人間が欠如した存在であることを表している。欠如存在というのは、別な表現をすれば意識をもって存在していることを言っている。意識があるということはいつも充足しているのでなく、あれこれと考え、絶えず何かを求め、自己充足していない存在で、何か欠けていることを意味している。したがって、人間が考える存在であるという意味は、何も論理的に考え、推論していることばかりではなく、あれこれと考えながら惑い、悔やみ、気苦勞の多い生活をしていることを言っている。つまり西欧での人間の定義が理性的存在であると定義するのはただ単に人間が考えるということばかりではなく、人間がさまざまな意味において欠如的存在であるということと言っている。このことを別な表現に表現するなら、人間はいつも何をするのにも充足せず、中途なことしかしない存在であると言える。それだけ、人間は可能性を求めて、可能性を追い求めている。人間ほど何かを求めて、あれこれと何かを企てるものがない。人間は何かと企てることは、つねに何かをしようとしている。

人間は自分の可能性を求めて、さまざまなことをするし、自分をつくりあげていこうとしている。ともあれ、人間は欠陥の多い、満たされることのない、限りない欲望に生きる存在であるともいうことができる。人間ほど欠陥の多い、悩みの多い、不安に満ちた存在はない。人生には楽しみが多いように見えるが、その楽しみには常に苦しみが伴っている。その苦しみには、いろいろとある。例えば、生みの苦しみ、何か働いて汗を流すときの苦しみ、愛している者と別れたり、愛する者を失った苦しみ、恨みや妬みや憎しみを受ける苦しみ、病気による苦しみなど、苦しみはどこからか知れず起こってくる。そして苦しみはいつも絶えることなく、私たちに襲いかかるのだ。その意味から、人間は「病める存在」であると言える。「病める存在」ということによって、人間の有限性が象徴されている。しかし人間が有限性でありながら、人間は無限性のことを考えることができるのも人間の特徴である。この複雑な存在が人間である。

人間が生の流れのなかであって、さまざまに自分を変えようと生きているが、人間であるが、何をするにしてもつき破ることのできない壁がはだかっている。人間の条件にぴったりとつきまとっている生老病死という枠組みのなかで人間が生きている。自分の生を自分の意志によって自由にできるわけではない。生老病死という条件を考えてみるがいい。たとえば、生まれるにあたって私たちは何一つ知れされることがない。いったん生を与えられるとその生にはいつも死が寄り添っているし、生きている限り病や老いを免れない。そして私たちはきまって死すべき存在として生きている。私たちはどんな意味においても死を免れない。人間は有限性であることを免れえないのだ。

有限であることは、私たちが時間のなかで生き、そのなかでさまざまな出来事を体験し、そのなかで私たちは自分を変えようとしながら生きようとしている。しかし自分を変えようとして生きているが、特に変わらないで自分の人生を終えてしまう場合もある。私たちは自分を変えようとさまざまに

企てるが、結果としてその企ては決して新しいとは言えないことが多い。それにもかかわらず、人間は自分が変わろうとして、いろいろと企てる。病めるもとなつていゝもの探し求めて、その原因を探し求め、それさえ分かればと一生懸命になるが、人生がそう簡単にいかない。そんなとき、人生の虚しさを感じさせられる。私たちは自分の生を精一杯生きて自分の人生を有意義なものとしようとするが、自分の思いがなかなか思いのままにならないのが常である。

何故だろうか。人間は生の流れのなかで生きなければならない。この生の流れにあつて、人間はさまざまな制約を受けて、それらの制約に悩まされて生きている。こうした人間の条件を踏まえて、人間の何かを問うことにこの書の目的がある。そして人間の何かを問うことは、究極に自分の何かを問うことである。私たちの物事をいろいろと尋ねることは、結局自分のためにすることであり、自分が何であるかを理解することである。この書を書こうとしたのは、こうしたことである。医科大学で何十年も学んできて、ようやく形ばかりの書ができたのも、少なくとも自分に言い聞かせるために、私の思いを綴った。私の周りの人たちが医学を学ぶ人たちであることから、この書を単なる人間学でなく、悩める人間、病める人間を論じていきたい。したがって、この書はバイオエシックスの問題を扱うが、病める人間を中心に論じたい。そんな意味で、この本を〈病める人間学〉と名づけたい。〈病める人間学〉を問うことによって、病める人間の何かを尋ねたい。

**病める存在** ニーチェは「人間は病める動物である」と言ったが、生きている限り、人間は「病める存在」である。「病める」ことには、病も含まれるが精神的に病めるという意味が含まれている。それには人間の有限性についてのさまざまな思いが含まれている。したがって、「病める存在」といふことには、さまざまな「悩み」「不安」「怖れ」「おおのき」「憂愁」などを含めて、人間は過去の追憶とか、現在の思い煩い、将来の思い煩いや不安や期待などを寄せて生きているのだ。

「病める存在」ということで、さしあたって病のことについて見てみたい。あまり日本では区別されていない「病氣」と「疾患」との区別についてとりあげたい。エリック・キヤツセルに従つて、ヨーロッパの社会の「病氣」と「疾患」との差異についての文化的信念となつていゝものを見てみたい。キヤツセルによれば、「医師が関心をもつのは、私たちの肝臓であり、疾患(disease)は身体の器官にかかわり、疾患は身体の器官の構造の変質あるいは生化学的変化を特徴とする器官ないし体液の障害を意味するものに使用し、そうした変化がなければ病氣(illness)ではないとされている。病氣は人間が所有する何かにかかわる。病める存在としての人間は、ある種の身体の疾患によって現在では病氣とされているが、私たちはある機関の構造の変質や変化の兆候がなくとも、病氣となる」(『J』)と言つていゝ。この区別は重要である。少なくともヨーロッパの社会ではそうである。このように厳密に区別するところに西欧と日本との相違がある。西欧は分析的に捉え、言葉を定義して用いゝ。私たち日本人にはこうした定義には馴染ない。しかしこの区別は重要である。私たちはこのような定義を大切にしなければならない。

しかし人間が生きている限り、病める存在である。身体の疾患を患つていゝ限りにおいて、人間は確かにキヤツセルの言うように、人間は病める存在である。人間はホモ・パティエンス(homo patiens)であると言われている。ホモ・パティエンスといふのは、耐える者、我慢する人といふ意味である。patientといふのは、英語のpatientといふ語と語源が同じである。生きている限り、人間は身体的にも精神的にも病める存在として生きている。したがって、病めるといふ語を使うとき、たんなる病氣になるといふのではなく、人間が悩みながら生きていると言えゝ。人間は、パスカルも言つていゝように、この世で最も弱い者である。しかし意識をもつことによつて、人間はこの世で最も強いものとな

ると言えるかもしれないが、意識をもっているがゆえに、悩む。

何故「人間は病める存在」か。それは人間が有限であるからである。有限であることは、人間が生老病死という条件を必然的に受け入れなければならないからである。私たちの生は時のなかにおかれている。生を受けることも、老化することも、死に至ることも避けることのできることができない条件のなかで生きている。特定の両親から生まれ、ある特定の社会のなかで生き、そして決まって死んでいく。私たちの生の大抵は受け身の生であり、自分の生を自分でどうにかし生きること稀である。生のはんとどろが自分たちの祖先から受け継いだ文化や習慣などを受け継いで生きている。私たちは幾重にも受け身の立場で生きている。時によっては、受け身の生に立ち向かい、自分の生き方を求め、自分の生を充実しようとして生きる。その生き方は時として歴史に残るが、大抵は無名のまま忘れ去られてしまう。それでも、一つ一つの生は懸命に生きるのだ。少なくとも自分たちの生を懸命になって生きるのだ。こうした人間の努力や努力が報われなかった数々の痕跡が無名の歴史に刻まれている。

一人ひとりが生きるにあたって、〈生きるに値する生は何か〉、〈どうしてよりよく生きれるのか〉と問い、人間は〈よりよき生とは何か〉、〈何が人生にとってよいのか〉、〈幸せとは何か〉を自分に尋ねてきたのだ。自分の人生をよい方向に歩むことは容易ではない、さまざまな障害が人生に立ちだかる。人生はままならない。何故人生を苦しみに満ちているのか。何故こんなにも生きていくことがつらいのか。つぎつぎと新たな悩みが人間を襲うのだ。人間が有限であることに苦しみの原因がある。己の有限性をよくみつめ、自分の生を深く反省しなければならない。

この書は、このような意味において、人間の何かを問い、病める存在の意味を尋ね、生の意味を問うことに向けられている。そしてこの問いを自分にに向けて、自分の何かを問い、自分の生き方に何らかの示唆を与えることにある。私たちが人間である限り悩むのは免れない。病める存在こそ、人間の赤裸の姿である。人間は悩みをもっている。この悩みを追うことにこの書は課題としている。

**人間学の問題** 人間とは何かと尋ねとは、私の〈人間学〉の課題である。ただ他の動物と共通する性質、たとえば、生物学的に、生理学的にあるいは生態学的に共通する性質には向けていない。むしろそうした性質の探求も人間の何かの答えの一つである。人間の理解にはその探求も必要なことは言うまでもない。しかしここではそうした探求を他の諸科学の探究に委ねたい。ここでは動物的人間 (*homo animalis*) ではなく、人間的人間 (*homo humanus*) を問題にしたい。言いかえれば、ここでは諸科学がしているように人間をある特定の領域に限定し、自然科学的に分析的に把握するのではなく、人間を全体的に把握し、人間のあり方を問い、価値を志向し、生きる人間の何かを問うことにある。言い換えれば、人間の価値の何かを捉えたい。

人間学が問題する人間の問いは何処からからも問題にすることができる。たとえば、バイブルの一節から、あるいはホーマーの『オデッセイ』から、トーマス・マンの『トニオクレル』から、あるいは孔子の『論語』から、または現代作家から、あるいはエジプトの『ピラミッド』とか、あるいは一人の老人のさびそうな面影から、何からも問題にすることができる。そのぐらい人間が足跡を残してきたものすべてを取り上げて人間を問題にすることができる。ここでは現代の童話作家ミハエル・エンデの作品『モモ』を引き合いにしよう。誰でも何でもいい、『モモ』を引き合いにするのは、人間とは何かという問いに答えてくれるからである。

『モモ』には、現代の人間が鋭く描かれているからである。現代は時間を借し、時間を大切にそうに毎日を送っているが、実は時間を忘れて生活している。『モモ』は時間と何かを考えさせてくれる。時間は一体何か、私たちは時間の意味を知っているのであろうか。私たちは時間のただなかに生きて

おり、時間との関わりが決して切り離すことができない。時間とは私たちにどのように関わっているのだろうか。この童話は私たちに時間の何かについて考えさせてくれる。私たちは人間の行く着くところを知らずに毎日を送っている。それにもかかわらず私たちは何かを求めて生きている。この不思議のもの、それが人間である。

時間が何かという問題を不思議とロマンをもって語っているが『モモ』である。時間の只中に生きながら、私たちは時間の何かを知らず生きている。時間との葛藤を心の問題として描いたこの世界は私たちを毎日の日常生活からロマンの世界に誘うのだ。私たちは日常生活を送っているが、その日常生活をあくせくと暮らしている。日常生活を考えてみようとしな。哲学が問題にする人間とは、日常生活にあつて日常的行為をしている人間を見つめる。何も特別な人間だけを問題にするのではない。人間の悩める姿を問題にするのであつて、決して特定の人間だけを問題にするのではない。日常生活にあつて悩み惑う姿が人間らしい姿でもあるが、そうした人間も何かを求めて生きている。ただ何を求めていいのかわからずに生きているのも知れない。しかし何かを求めて生きていることは確かである。人間が生きていることは悩み多い人生にあれこれと関わりながら生きている。人間は病んでいる存在である。人間ほど悩み、苦しんでいる生き物はいない。よく昔から人間は知的な存在であると言われてきたが、それなりに人間の特質を捉えている言葉である。人間は病める存在であるのは、知的であるからであると言える。知的であるからこそ、人間はあれこれと悩む。それぐらい人間が知的であるのは、答えが定まらないからであり、人間の知恵には惑いが入り込むのだ。人間の知性は感性的なもの、欲望的なもの、意志的なものの諸要素が入り込んでいる。知的なものと言っても、人間の知性は雑然として、なかなか純粋に捉えられない。

人間学はまず第一に哲学を問題にしなければならない。哲学 (philosophia) という言葉の意味が知 (sophia) の愛 (philo) という意味である。知を愛するというのは、知を限りなく愛するということである。つまり知の追求をどこまでもするということで、知が飽くことなく尋ねられるということである。飽くことなく尋ねられるということは、人間が探し求めている知がなかなか手にしえないということである。私たちは本当のことを知りたがっているが、それでも本当のことを知れずに迷っている存在である。この本当のことを知ることを愛するのが哲学である。本当のことを知ることが、真理とされてきて、哲学が真理の探究とされてきた。

哲学は古来知の愛 (philosophia) であり、真理を探究する学問であつた。人間の真実を求める欲求は激しかった。それがギリシアにおいて philosophia として実つた。ギリシアにおいて哲学の始めがあつたとされ、私たちは philosophia という言葉を見出し、哲学の研究がギリシアにおいてはじめてなされてきたと教えられてきた。しかし哲学がギリシアにおいて始めてされてきたのではあるまい。人間が存在したところどこでも哲学がされたと考えた方がいい。人間である限りは、悩み、苦しみ、つまり病んだ存在であるから、また知的に迷い、本当のことを探しも求めようとした筈である。人間であるなら、どうしても事柄の真相を知りたいという欲求があつた筈である。この本当のことを知ろうとする態度が哲学を生み出した。

哲学は人間学を導く鍵である。その意味で、〈哲学とは何か〉を知らなければならない。私は〈哲学とは〉問うとき、その問いを人間に限って問いたいのである。したがって、ギリシアでは、哲学は最初自然に関わつたが、私は人間の問題に関わりたい。自然の探究に関わるのではなく、最初から最後まで人間を探究するのである。この探究こそ人間学である。私たちが尋ねる人間とは生物学的人間ではなく、人間的人間である。人間を生物学に尋ねるのではなく、人間の生き方を問い、人間がなぜ価値を求めるのかを問いたい。つまり人間の文化的、歴史的、精神的生を尋ねたい。これが私のいう

人間学的生なのである。人間に特有な生を問うことが人間学の課題と言えよう。本来哲学はこの人間学に関わると考える。

**真理とは何か** 今日真理とは科学的知であると言われている。しかし科学的知が現在真理であっても、その知識が新しい知識にとって変わるような事態が起こりうる。科学的知識はいつもこのように変わりうる知識でありうる。科学的知識はその意味で相対的知識である。それに対して哲学の求める知識は、究極的に変わらない知識、いつの時代も通用する知識、つまり永遠に変わらない知識である。永遠の知識はあるというだろうかという疑問は当然生じるであろう。しかし永遠の知識、つまり永遠の真理に挑戦してきたのが過去の哲学の歴史である。だが、人間学が求める知識とは、そうした類の知識ではない。その意味で哲学が過去求めてきた知識ではない。つまり永遠の知識を求めることを課題にしていない。だからと言って、科学的知識のように、相対的知識で甘んじているのではない。人間学は知識の永続性を求めるが、永遠の知識を持ち得るとは考えない。人間が永遠の知識を持ち得ると考えられない。出来る限り、変わらない知識を持ちたいという願望は分かるが、それにもかかわず、私たちの知識は有限である。この有限性のなかで、私たちは知の探究をしていること自覚すべきである。

したがって、有限な生をもった人間が真理を求めること、人間はどうして有限な生を送るのに、変わらない真理を求め、死んでいくのか。どうして人間は変わらない真理を求めていくのか。この事実は分からない。だが人間は永続的な真理を求めている。この不可思議な存在、それが人間である。人間は何かという問いこそ、解け得ない得ない問いである。たがら人間とは何かの問いは、古来ほとんど無数繰り返して尋ねられてきた。そしてそれに対してそれなりに答えが与えられてきた。

人間とは何かの問いに、たとえば、〈言葉をもち、意識活動のするきもの〉(zoon logon echon) とか、〈共同体を営み、法のもとで生きるもの〉(zoon politikon) とか、〈道具を製作し、道具を使う生きるもの〉(homo faber, homo laborans) とか、〈経済の人〉(homo oeconomicus) とか、〈宗教の人〉(homo religiosus) とか、〈遊戯の人〉(homo ludens) 等の答えが与えられてきた。こうした答えは西欧でなされたきた答えであって、どれも人間の何かの答えになっているが、どれも見ても人間の何かに決定的な答えではない。人間とは何かに答えるのは大変難しい。しかし人間は真理を求めて生きていることは確かである。人間は〈真理とは何か〉を捉えていないが、論理を探し求め、その糸口を探し真理の探究を求めているのが人間である。人間とは何か問うことは一見容易であるようでありながら、この問いに答えることを難しい。

**生命の尊厳と生命の質** ところで現在医療は大きく変わってきている。高度に医療技術が発展し、専門化が一層進められ、検査技術も精密化され、病める身体は科学的調査が推し進められ、身体は対象化されて、可能限り機械化に分析され、医療技術が急速に推し進められている。いまバイオエシックスが医療の領域で大きく取り上げられているが、それは医療が急激に高度化されているのが原因の一つになっている。バイオエシックスがなぜ今日問われているのかが問題になろう。医療の客観化に伴って、従来の医師—患者関係が恩恵関係でやっていけなくなった。医師は誠心誠意患者の病の癒しに尽くし、患者は医師の言うことを信頼し、それを黙って受け入れていた。しかし人権問題がやかましくなると、医師—患者関係に権利問題がはい込んできたのであった。いまでの人間理解では捉えないほど人権の問題が大きくクローズアップしてきたのであった。

従来医学を支えた倫理問題はヒポクラテスの医の倫理であった。ヒポクラテスの医学は実に二千数

百年にわたって西欧医学の倫理を支えてきた。そして1948年にジュネーブで世界医師会総会において医師会の宣言であるジュネーブ宣言が採択された。それはヒポクラテスの医の倫理の現代版であった。そして1968年シドニーにおいての世界医師会でもそれが修正されて採択された。二千数百年間の長きにわたって、西欧の医学会ではヒポクラテスの医の倫理が支配していたのであった。しかし現在で新しい学問バイオエシックスが生まれ、医の倫理も大きく変わっている。医療の高度の技術が開発されれば、一層人間の何かが問われてくる。

現在医療は生死をめぐる大きく変わってきている。まず死の定義が大きく変わってきた。死は人類の出現ともこれまで心臓と肺臓の不可逆的停止であった。それが近年になって脳死を人の死に入れて臓器移植に踏み切ったのである。その最初となったのは、1967年南アメリカで心臓移植が行われたことが契機となった。そのときから脳死議論が始まった。アメリカのハーバード大学のメデカル・スクールで脳死議論が起り、たちまちその議論はアメリカ全土に及んだ。そしてその議論はアメリカばかりではなく、たちまち世界でなされていった。脳死の論議は、これまでの人類のニュースのなかで何よりも早くされ、決定された。しかし日本では、心臓移植は1968年に世界で32番目になされたが、その後およそ30年間まったくされないままになっていた。それが1997年に脳死が国会を通過し、脳死も人の死として認められるようになった。

ともあれ、人の死に画期的な出来事として脳死が承認されたが、その一方医学の技術の進歩は人の生にまで及んだ。そして妊娠中絶や対外受精などが認められた。つまり人間の生死の問題が問われてきたのであった。生死をめぐるあらためて〈一体生命とは何か〉が問われ、〈一体生死とは何か〉、〈人間は何ために生きるか〉という問いが私たちを悩ませている。(生命は尊い)と言われているが、そもそも(生命の尊厳)(sanctity of life)とは何かと問わざるをえない。そして今日〈生命の質〉(quality of life)とは何かの問題になっている。つまり〈生命の尊厳〉と〈生命の質〉が問われている。

今日生殖技術が発展し、この技術の開発により、これまで子供のできない人に子供を生むことができるようになった。生体の受精のメカニズムが明らかにされ、不妊の原因が徹底的に研究され、着床への試みが実験され、受精の研究は一層精密になされている。1978年に英国でステップトとエンドワーズによる対外受精・胚移植が行われた。日本では、東北大学で1983年に体外受精が行われたが、多くの問題を生み出した。たとえば、身体に異常を起こし、奇形児などが生まれた。また受精卵の提供を巡って、〈借り腹〉問題が出てきている。この問題は広く社会に問題を引き起こし、アメリカでは〈代理母産業〉が出てきて社会問題になっている。遺伝的に健康で賢い子を産むための品質の良い精子を提供するための精子銀行ができたりしている。さらに遺伝子操作など、バイオテクノロジーと対外受精とを結びつけ、儲けを企む企業などが出てきている。またこの問題はもとよりプライバシーの問題から出発しているので、プライバシー権の侵害などの問題が社会問題となってき、波紋は大きいと言える。

ともあれ、生命の誕生の問題は医学が介入し、生殖技術の開発が多くの社会問題を投げかけている。また医学の発展により死の問題にいろいろな問題を投げかけている。この問題は生命の尊厳や生命の質の問題に大きな問題を投げかけている。生命の尊厳に関して言えば、古来生命をもつということは尊いと見え、子が授かるということは天の恵みとか神の授かりとして受け取った。この考え方が〈生命の尊厳〉とされ、それを守ることが医師のモラルとされてきた。しかしこうした考え方はいまや医療技術の高度な展開によって問い直されてきている。

一体人間が尊厳であるということは何を意味しているのか。生命とは何か。その生命が尊いとは何

を意味しているのか。人間であることはどういう問いであるかが問われている。誰でも健康で、正常な子が生まれ育つことを願っているし、奇形児とか異常児とか生まれたいことを願っている。しかし人間が誕生することにこうした奇形児とか異常児が生まれることがどんな意味をもつのであろう。生命が聖性をもつという意味を考えなければならない。この問題は生まれる子だけではなく、その子が成長するまで続き、否、その子が死するまで付きまとうのである。この問題は私たちの生命の問題がどうであるかを考えさせてくれる。今日の医療の高度の展開はいままでと比べ物にならないほど人間の生死の問題に大きな影響を与えている。ともすれば今日の医療は生命の質を求め、生そのものの尊さを省みないことが多くなった。

生き長らえていることに起こるさまざまな出来事をしっかりと見つめ、人間の何かを考えなければならない。生命の尊厳とか生命の質という言葉がむやみに出ているが、そもそも人間として生きていくことの意味が何であるか。人間は、生を受けて生まれるが、生まれきた者は決まってすべての者は病める存在として生きるであり、そしてどの者も決まって死に至る存在としてある。このことの意味を考えなければならない。生命が尊厳であるという意味は何か。そのうえで生命の質とは何かということを考えなければならない。生命が尊厳であるのは、生命を受けることであるが、その生命がいつでも朽ち果ててしまう可能性にあって生が成り立っている。生命を持つ者は必ずその生命に限りがあるということである。生命が尊厳であるというのは、その生命の長短を問わず、その者の一生が尊いという意味であろう。人によって生まれて死に至るまでさまざまな人生があろう。その間、人間は病める存在として生きるのである。人間の一生はさまざまに病む。その病める生が尊厳であるということである。このことを考えなければ尊厳という意味が分からないであろう。

生命の質ということは、生命が聖性であることを押さえて、つまり生命の尊厳ということを理解したうえで考えなければならない。私たちは今日生命の質のみを考慮に入れて行為しがちであるが、生命の尊厳ということ抜きに人間存在を本当に考えたことにならない。いま医科大学や医学部で、大学のカリキュラムが生まれ、そのなかで自然科学教育が優先されているが、その反面人文科学や社会科学がなおざりにされている。しかし医学部では何よりも人間の何が課題になってしかるべきである。医科学は人間についての総合の学問であり、人間のさまざまな経験を基礎にして成り立つ学問である。医科学は関わるのは人間の病に関わるし、人間の健康に関わるのである。人間の病はさまざまな原因があって、その解明がなされなければならないであろう。そのためにも人文科学や社会科学の果たす役割を十分考慮しなければならない。

病気になるのは、いろいろな原因がある。たとえば仕事のし過ぎで身体を壊したり、飲みし過ぎて肝臓を悪くしたり、老化して歩行が困難になったりする。もう少し早く気がついておけば回復も早くなっていたとか、過労にも十分休息をとれば、癒されていたであろうというであろう。しかし病になった者は過労になるほど仕事をしなければならぬ事情があっただろうし、飲まなければならなかった事情があっただろうし、またそのときはそれほど悪く思わなかったこともある。いくら健康に気をつけても老化という現象には打ち勝つことができないこともある。こうしたことのほかに、患者は病気のことですさまざまな不安を抱くであろう。たとえば、医療費のこと、勤務のこと、家族のこと、その他さまざまなことに心配しながら、病気にかかっている。患者は病気になることによって、自分の生活のことに思いやって、自分の生を思い煩っている。この不安な思いが病気を悪化させるかも知れない。身体の病によって、人間は精神の病に冒される。また精神的に悩むことによって、身体的病にもなるのである。人間は文字通り病める存在である。

この点をしっかり考えなければ（人間の尊厳）の問題も〈人間の質〉の問題も考えられないである



う。病にはさまざまなメンタルな面があることが心身医学で説かれるが、医療技術が高度に発展すればするほど、医学は身体のマカニズムに関心に向け、メンタルな面がおろそかになりがちであり、患者の生を全体的に見る目が失われがちになる。よく言われることであるが、医療が「病気をみて、患者をみない」と言われるが、医療を人間の生死から見つめ、その全体から人間の病める姿を捉えなければならぬ。

**西欧文化と日本文化と関係** 科学的知識が相対的であることによって、日本も世界の仲間入りが可能となった。しかし問題は物事の本質を問う姿勢である。日本人に欠けているもの、それが合理性を追求する姿勢であり、その論理的追求である。日本人は、物事を根本から尋ねる習性がない。しかも物事の根源に溯ってそれを論理で突き詰めることをしなかった。このことを徹底的に反省する必要がある。いま世界の情勢は、何か永遠の真理を尋ねることを断念せざるを得ない状況であるようである。現代の哲学として、分析哲学とか科学哲学とか言われている哲学があるが、それらの哲学に永遠の真理が断念され、言語分析や科学論など論理の研究がなされている。また現代、最も実効性をもつ哲学として、近代の哲学が試みた合理性に基づく体系化を断念し、脱虚構化の方向に向かっている。真理はプラグマテイクにしか主張されていないが現状である。

しかし現代の傾向がそうだとしても、知識が相対的にとどまっているはずはないし、人間の求める知識はどうしても永続的知識である。このような知識は求めている。そこで私たちは科学的知識を求めるという方向ではなく、文化的社会的に規定されている精神的価値について求めるのではなければならないであろう。もっと簡単に言えば、〈人間とは何か〉について、「人間の生きるときの価値は何か」と尋ねてきたのが哲学であり、哲学の課題は最終的にこの問いに答えることにある。この問いは科学的知識でもって応えることとことのできない問いであり、しかもこの問いは古来問われてきた。この問いは科学的知識を必要とするが、科学的知識では応えられない知識である。この問いこそ哲学が応えなければならない問いであり、この書の目的である。

日本人は哲学をもたない民族であるとされてきた。これはこれまで日本人の書いてきた書物をもても分かるのであるが、日本語となる大和言葉には抽象語となる言葉が極めて少ないことに関係している。たとえば、宇宙 (universe) はアメツチであるが、この言葉は中国語の天地からの訳語である。また数の概念も曖昧で、たとえば一匹の犬も複数の犬も同じように取り扱われて、数が分析的に使用されていない。抽象化がなされるのは、言葉が論理的に使用されていて、用いられなければならないのだが、大和言葉の構造はそうでない。中国から漢語の輸入で抽象語が日本に入り込んでくるが、日本語の基本となる大和言葉は西欧的な論理性がない。それゆえ、日本語では西欧語の意味で、論理の組み立てによる哲学が展開されなかったのうなづける。

西欧の哲学は、ロゴスの追求であり、その意味で論理を追い、合理性に基づく事柄の探究であって、その探究は真理の探究と呼ばれた。古来日本人のものの考え方は、論理を追求する西欧的な発想はしなかった。哲学といえば、明治になって始めて紹介され、日本人は哲学を知るようになった。哲学の歴史が西欧にあり、それが2千5百年以前からはっきりとした形を整えてあり、私たち日本人は、西欧では哲学の最高のよりどころとして学問がすすめてきたことを本当に知る必要がある。西欧の文化の重みと深さを知らされた日本が西欧の文化を学び始めて百数十年間学びつづけてきた。その間日本人が作りあげてきた精神文化な価値とは異質の文化を受け入れるのに大変な困難があった。こうした文化の相違点を認め、そのうえで〈人間の何か〉を捉えてみたいと考える。

## 第二章 人間とは何か

### 1 人間の尊厳を尋ねる

人間の尊厳〈人間とは何か〉という問いに応えることが私の〈人間学の課題〉である。いま特に問題となっている〈人間の尊厳〉という言葉がある。この〈人間の尊厳〉という言葉は自然や自然における人間以外の生命体に対していわれた言葉である。この言葉は「人間は自然や自然において存在しているものよりも価値がある」という考え方をしている。これは自然にあるものに階層をつけて、人間を一番うえに位置付けて自然をみる方法である。無機物的存在、植物的存在、動物的存在に分け、そのなかで人間が最高の価値ある存在であるとみる見方から出てきている。

この考え方は生きとし生けるものの憐れみを説き、輪廻を説く仏教思想とか、自然には言霊とか御霊（みたま）が宿っているとしてきた日本の神道思想とかとは根本的に異なっている。この考え方は西欧の考え方である。特に西欧の近代的な考え方である。ではどうして人間が価値をもつというのか。まず西欧的な考え方人間観に基づいている。人間に価値をおく考え方は、ヘブライ思想に根をもち、それがキリスト教思想に受け継がれて、それが近代ヨーロッパの考え方に入っていく。

『バイブル』の「創世記」があってそれには天地創造ならびに人間創造が書かれており、神が無からの世界の創造と人間の創造（*creatio ex nihilo*）のことが書かれている。この物語は神が世界を作り、そしてその土から自分の姿に似せて（*imago dei*）人間を作り、その似姿に神の息吹を入れたという物語である。世界（自然）は人間が生きるために造られた。ここから世界（自然）の人間が最高に価値ある存在だという考え方が出てくる。人間の生命は神によっているという考え方からして生命の聖性（*sanctity of life*）が説かれ、生命の尊厳が説かれている。現在医療において〈生命の尊厳〉や〈生命の質〉が議論され、バイオエシックスの重要な問題になっている。いま論じられている〈生命の尊厳〉や〈生命の質〉という言い方は西欧的な人間観から捉えられる言葉であり、このように人間をみる見方が西欧人からみた見方である。

私たちが人間は何かについて尋ね方が実は西欧的な尋ね方である。私たちはいま人間の権利を擁護して基本的人権を主張して、人間に生まれながら与えられている基本的人権がある。基本的人権とは、どの人間にも平等と自由の権利あるということである。この考え方は西欧の人間観に立っている。西欧の歴史は、平等と自由を目差していろいろな市民革命を闘ってきた歴史であった。人間が平等で自由でなければならないとする理念は、西欧の特有な考え方であって、これまでの人類の歴史を通じてこの理念が始めて西欧で主張されたのであった。そしてその考え方が西欧の市民革命にうたわれて、フランス革命の人権宣言として発せられた。そればかりではなく、それが1948年には国連の〈世界人権宣言〉となって世界の人々の理念とされるに至った。

ところで、〈平等〉という観念は、もともとすべての人間が生きている条件とか生きている状況はどうであれ、人間は神の前に平等であるという考えである。人間の〈平等〉は、人間が他の人間の支配を受けたり、他の人間に従うというのではなく、神の前に平等に立たされるというキリスト教の教えに従っている。〈平等〉という観念には、キリスト教ということが前面に出ていないが、根底にはキリスト教がある。今日の医療も人間の〈平等〉観を基本的に受け継いでいる。医療は、「患者の健康状態がよくなくとも、人間が生まれつきもっている聖性（神聖さ）ゆえに、すべての人間の生命は平等で絶対的な価値をもつ」という理念でなされている。そのような理由から、人間の〈平等〉という観念から〈生命の尊厳〉という考え方が主張されていると言える。

〈生命の尊厳〉思想は人間が存在しているという事実が尊厳（聖性）であるということである。人

間が生命体として何か欠陥があるが、その欠陥がすばらしいというのでも、欠陥をもつゆえに、尊いというのではない。この考え方によれば、すべての人間は等しい価値を有し、等しい権利を有すると主張する。この思想によれば、人間の生命はただ新陳代謝や生命を維持しているだけであっても尊重されるべきであり、したがって、脳死の状態であれ、死に行く過程にあれ、どんなに身体が損傷した状態であれ、あらゆる手段を通して可能な限り、長く生命を維持しないのは間違いである。すくなくとも人間の生命はその状態がどうであれ、あるいは社会的身分はどうかであれ、すべて平等であるというが〈生命の尊厳〉思想の説くところである。この考え方は、神の観念が最初にある。神が与えた生命の尊さを、私たち人間は尊重すべきである。人間が勝手に裁きを与えてならないという考え方を根底にしている。

〈人間の尊厳〉思想はキリスト教の教えと切り離すことはできない。だが生命が何故尊厳であるか。いまこれをキリスト教思想と切り離し、その理由を一般的に尋ねるならば、生命という不可思議なものに対してどうしても限りのない畏敬の念をもってしまふであろう。この感情は大切なものとして生命の尊厳を説くのがカイザーリンクである。彼は、「生命への不可思議な畏敬、生命が終息してしまうことへの怖れの感情」があるからだとして述べているが、論理では尽くせない神秘的で、神聖さの感情が〈生命の尊厳〉を呼び起こしていると述べている。しかし一般的に言えば、こうした問題においても西欧人は論理を尽くして応えようとしている。こうした点で言えば、カイザーリンクの言うように、神秘的で論理では尽くせない神聖さの感情が〈生命の尊厳〉の感情を呼び起こしていると言えるが、〈生命の尊厳〉は古くキリスト教に由来し、その伝統をもちつづけている。

〈人間の尊厳〉は、もともとその思想はバイブルにあるのであるが、それがはっきりと人間尊厳の思想という形をとってあらわれるのは、ピコ・ミランドラなどによる学者たちであった。生命尊厳思想は、それより現世の人間を祝福し、神の栄光を賛美する方向に向かった。ルネッサンス後受胎告知の絵画が一経描かれるようになったのはその影響である。

人々は生を受けることに神の愛に感謝の気持ちを捧げた。生命を受けるということは、何にまして、神の恵みに感謝することであった。人々は神の与えた生命を大切に守った。それがそもそも〈生命尊厳〉の思想だった。

西欧の人間観は、人間の人間たるゆえんは基本的に知的に活動することであった。それは、創世記の〈人間創造〉説、ギリシアにおける人間を〈理性的存在〉などをみれば分かることである。西欧人は、人間をパーソン (person) というが、それは人間が知的に活動できるという意味である。これはすでに述べたように、『バイブル』によれば、神は人間を創造にあたって土で自分の似姿に似せて人間の姿を造り、神の息吹を吹き込まれて、人間をつくったと造ったかを語っている。この人間創造の話によれば、神の息吹を吹き込まれたことが、人間の知性の形成になっており、人間の本性は知性によって成り立つというのである。したがって、人間にふさわしい行為は、知性的な行為ができるということにある。

生命の誕生は神の愛によるが、人間が人間らしく生きることが最も神の恩寵にかなったことによる。つまり〈生命の尊厳〉はそれなりに尊いばらなければならないが、〈生命の質〉がと問われてくる。現代になればなるほど〈生命の質〉が問われている。現代は、高年に医療技術が発展していて、〈生命の質〉を高めようとする風潮が強い。〈生命の質〉ということによって、何を言っているかを考えなければならないであろう。

西欧では、古来人間の何かが問われ、その答えとして人間は知性の存在であるとされてきた。人間が知的存在であるとされてきた。このことから、人間の本質は自由であるとされてきた。いま私は〈平

等〉の観念が〈生命の尊厳〉とか〈生命の聖性〉とかかわるとのべたが、人間が知的に活動できることからさらに人間が〈自由〉であることを結びつけて考えたい。人間が知的に活動できるということは、基本的に自分の行為が自分で決定して生きているのである。人間の行為は動物の本能的行為とは違って選択的行為をしている。たとえば、私たちが日曜日朝七時に起きるとか、そのまま寝ているとかする。また起きて教会に行くか行かないかなど選択して生きている。人がしてはいけないという行為も自分で決定しやっつけられる。自分の行為を自分で決定して行為することができる。そのために、自分のした行為がたとえ自分を苦しめることになるおとも、自分の行為は自分で引き受けなければならない。どんな行為をも結局は自分で引き受けなければならない。つまり人間のどの行為もその人の自由なのである。〈・・・しなさい〉という誰かの命令によって、行為したとしても、それは結局その人間が自分の選択によって、その命令を自分に受け入れて行為したことである。私たち人間のどの行為も自分の選択的行為ということになる。このように、人間は選択的行為をせざるをえないようになっている。ここに人間の自由がある。自由とは、この選択的行為のことである。

自由をこの選択的行為とすれば、人間に自由があることになる。何も何でもしたいことをできることを自由と呼ぶ必要はない。人間は空を飛ぶことができないので自由がないとか、人間は生命に限りがあるので自由ではないと言わなくていい。無論そうした類な行為を自由と呼んだっていい。しかしそれらを自由と呼んだら、人間は自由などはないと言えるのではないか。自由とは選択的行為をすることができるのであれば、どの人間にも自由があると言える。サルトルという哲学者は「人間は自由の刑に処せられている」と述べているように、人間のどの行為も結局自分で決めなければならないというのが自由論の根底にある。

サルトルの自由論に従えば、人間が知的に行為するとは、結局は自分の行為を自分で決め、行為しているということである。いま人々の関心を引いている安楽死や尊厳死などの問題はこの〈人間の質〉の問題に関わっている。安楽死や尊厳死が問題になるのは、自分の行為を自分で行為することができない人、あるいはそうするに疲れた人、またはそうすることに意識をもっていない人が問題になっている。〈高齢で、自分のことを自分で選択できなくなっている人〉、〈植物状態にある人々〉、〈重度に障害ある人々〉などがそうである。こうした人々にも生命があり、生物的に生きている。しかし人間の本质とされている知的な行為をできなし、人たちが問題となっている。こうした人たちはもう生きているのでないと考え方をしている人たちもいる。こうした発想が出てくるのも今日の高度な医療技術の展開から帰結した結論である。

〈人間の尊厳〉という考え方から、〈生命の質〉という考え方まで、今日の医療の抱える問題は大きな問題を抱えている。しかし現在問題になっている、脳死、臓器移植、安楽死、尊厳死、ターミナルケアなどバイオエシックスで問題になっている問題など問題は西欧的人間観からみることができる。ともかくもこの〈生命の尊厳〉という考え方がどこからできてきているかという問題を取り扱ってみた。いま問題になっている医療で問われている人間の問題は西欧的人間観に基礎をもっている。

**生命の質** バイオエシックスで最初に心にとめなければならない問題は、人間の具体的、現実の生命であって、生命の尊厳ではないことである。したがって、〈人間の生命〉が問題になるのは、〈生命の尊厳〉ということではなく、〈人間の質〉が問題になっている。バイオエシックスは〈人間の質〉に応えようとしている。

今日尋ねられているのは〈生命の質〉であり、〈生命の尊厳〉、つまり生きとし生けるものの尊厳は第二義的である。確かにラムサ会議にみられるように、世界に存在している生命体を大切にしようと

して地球環境を保護しようとしている人々もいる。しかしメデイカルな領域では、〈人間の質〉の問題が第一義的に取り扱われている。地上における存在者に階層をつけ、そのなかで最高に価値ある存在者は人間であるとする西欧的な考え方を取っている。今日のバイオエシックスで強調されているのは〈生命の質〉であり、それも最も価値ありとされているのは、〈人間の質〉が問われている。

バイオエシストのなかにあつて、西欧で大きな問題を起こしたピーター・シンガーがいる。彼は重度の障害をもって生まれた新生児の安楽死を擁護したであった。シンガーの主張はナチスの安楽死の主張と同じことを言っており、彼の講演は認められないという抗議行動がドイツで起こった。障害者団体、遺伝子工学や生殖技術に反対する団体、反核団体、緑の党員から激しい抗議によって講演会が中止される事件が相次いだ。いまナチスの安楽死のことに触れたが、それは〈Aktion 4〉と呼ばれ、1939年に第二次世界大戦突入前後に行われた。そして障害児、精神患者、身体障害者、聾啞者などが強制収容所に入れられ殺された。それはユダヤ人絶滅計画が立てられ、大虐殺が行われたのと期を同じだった。シンガーの考え方をよく読んでみると、彼が〈生命の質〉に共感していることが分かる。

ナチスのこの法令は最良の人類を保存することを目的とした。この法令の先駆けとして、1933年に〈遺伝子孫防止法〉を法令に定め実行した。それは〈国家は明らかに病気をもつ者、悪質な遺伝のある者は生殖不能と宣言する。肉体的にも精神的にも不健康な者はその苦悩を子供に残してならない〉というものであった。シンガーはこれと同様なことをやっている。シンガーの言っていることを認めてはならないという非難が相次いだ。実際には、シンガーが言っていることは、障害児安楽死論を述べただけであるが、しかし彼の立場は〈生命の質〉の論理が説かれていることが分かる。

彼の倫理上の立場は〈優先功利主義 *preference utilitarianism*〉と呼ばれ、行動の善し悪しについてはその行為にかかわる関係者の利益を平等に配慮し、関係者全員の利益を最大にする行為が正しいとする理論を展開している。

**功利主義的倫理理論** 功利主義理論は、英国やアメリカで受け入れられている倫理理論で、西欧で優勢な理論である。この倫理理論は現代の民主主義社会を成り立たせている理論である。この理論はベンサムによって提案されたが、ベンサムはこの理論を英国人の良識に基づいて打ち立てた。この理論によると、よい政治とは、〈最大多数の最大幸福〉を日差して行われるべきことを理念として政治である。功利主義は社会の幸福を可能な限り最大多数に及ぼすのに、人々の利益を秤にかけ、人々の利益を最大限守るように説いている。

シンガーはこうした功利主義理論に立って生命の価値を捉えている。生命の価値をその生命がもつ利益に対応させている。たとえば、快楽や苦痛を感じる生命体は快楽を求め、苦痛を避けようとする。生命体は、このように快楽になる欲望を充足することを求める。そして欲望を充足することが生命体の利益となる。この立場に立つことによって、彼は重度の障害をもった新生児の安楽死を説く。

ところで、シンガーは生命体を三つに分けている。一つは、まったく利益を求めず、無感覚の生命体である。もう一つは快楽と苦痛だけを感じる生命体で、快楽を満ちし、苦痛を避けること求めている生命体である。三つめには、快楽と苦痛との感覚の他に、知性と自己意識をもつ生命体がある。このように生命体は、彼に従えば無感覚的生命体、感覚的生命体、人格的生命体に分けられる。そして生命体は、欲望が多く利益が多ければ、それだけ生命体の価値も高いと言う。

シンガーによれば、人格的生命体に動物を持ち込んでいる。たとえば、チンパンジーやイルカがそうである。彼らは知能や自己意識をもつ。それゆえ、彼らの人格的生命体も高い。人間も知能や自己意識をもたない者は人格的生命をもたないことになる。そんなに人格的生命をもっている彼らを殺す

ことは悪いと述べている。人格的生命体ということによって、もとより人間を念頭に入れている。人間とは何か問いに対して、知性や自己意識をもっているものという西欧人の人間観が依然としてはっきりとでてくる。そのうえで、人間でも知能や自己意識が欠けていけばもはや人間ではないと主張している。逆に人間以外の動物でも知能や自己意識があれば人格的生命体と主張している。つまり人格的生命体とは、パーソンであり、パーソンとは知性や自己意識をもっているということである。ここから彼のバイオエシックス論が展開している。

このように〈人格的生命は知能や自己意識をもっているもの〉とすることによって、生命の尊厳ということより、生命の質という観点が強調されることとなる。バイオエシストにとって、生命の尊厳よりも生命の質が問題になる。医学は生命の質の向上を日差して懸命になっている。そのために、たんなる生命体である人間は生物学的生命体と呼ばれ、ヒトと呼ばれている。つまり人間が人格的生命体であるためには知能や自己意識をもっていなければならない、そうでなければたんなるヒトと呼ばれ、それはナチスの〈アクション・フイーア〉のように、抹殺されかねない。今日のバイオエシックスの向かっている方向はどうやら〈生命の質〉を求める方向にあると言える。私たちの求める方向は（生命の尊厳）を求める方向でなければならない。生命をたぎらせて、生命観に満ちた生を送るのも人生の生き方の一つであろう。しかし生命の質とは何か。誰もが生きている限りは死する者であり、病や老いを免れえないものである。その生に質を考慮して生きるのはよいが、その生き方には限界がある。それよりも〈生の尊厳〉の意味をじっくりと考える必要がある。

**妊娠中絶** 現在〈生命の質〉の議論が提出されているが、妊娠中絶も〈生命の質〉の問題にかかわる。妊娠中絶に反対する議論はバイオエシックスの議論以前から説かれている議論で、中世に見られる見解である。生命は神から授かったもので、神の愛の証であり、それは神の限りない恵みの印であり、それゆえ、中絶は絶対に許せないという主張である。この妊娠中絶に関する問題は、近年に盛んに問題になっている問題で〈生命とは何か〉という議論を呼んでいる。この問題もバイオエシックスの議論となっている問題である。ここで妊娠中絶反対と賛成との議論を述べておきたい。

それでは最初に妊娠中絶反対の議論を述べよう。それはカトリック教の妊娠中絶に対する反対論である。それによると、

- 一、すべての人は生きる権利がある。
- 一、胎児は人である。それゆえ、胎児は生存権がある。
- 一、母親は生きる権利があり、生きる権利を決定することができる。
- 一、胎児には生きる権利があり、母親の決定権より胎児の決定権が優先されるべきである。
- 一、胎児は罪のない生命体である。それを殺すことは絶対に許されない。それゆえ、妊娠は絶対に許せない。
- 一、母親か胎児かどちらかが助かる見込みがある場合は、胎児の命が優先される。
- 一、胎児を殺さなければ母親が助からない場合には、ともに死を黙認する。死の黙認と殺人行為とは別である。死の黙認は許されるが、殺人行為は許されない。このようにして妊娠中絶は決してやってはならない行為である。

このカトリック教の妊娠中絶に対して、妊娠中絶を擁護することを押ししめる立場に立つ主張はつぎのようである。

- 一、胎児は受胎の瞬間から人格（person）ではない。

- 一、胎児に脳が形成された時期（およそ十数週間）にヒト（human being）となる。しかし脳の働きは幼児、子供、大人とは同じではなく、胎児は人格をもっていない。せいぜい可能的人格をもっているにすぎない。しかし実際の胎児の発達過程は連続的で、ヒトと可能的人格との線引きはし難い。そしてかりに可能的人格が胎児であっても、妊娠中絶は認められるべきである。
- 一、かりに胎児が可能的人格であり、生存権があると認めても母親の胎児に対する決定権は胎児の生存権よりも重い。したがって、母親の生命が脅かされるときでも無実な胎児を殺してはならないという主張は認められない。
- 一、母親の命が脅かされて、妊娠中絶をすれば助かる場合には、妊娠中絶は道徳的に認められなければならない。
- 一、母親に致命的な命に危険がないときにも、場合によって正当な権利から妊娠中絶を選ぶことができる。

妊娠中絶を擁護する立場は、胎児をせいぜい可能的人格とみなし、胎児をおろすことを正当化しようとしている。胎児は出産し、嬰兒として行為するようになるまではせいぜい可能的人格をもつと言えるが、人格はもたない。このように人間とはと尋ねて、人格的生命をもつものという人間の定義をバイオエシストたちは受け入れている。

ここで何人かのバイオエシストたちの発言をみてみたい。

- 一、たんなる生物的生命しかもたないものはパーソンではない。パーソンであるためには人格的生命をもたなくてはならない（エンゲルハート）。
- 一、脳が機能していることが人格的生命の必要条件である。道徳的に行為できることが十分条件である（エンゲルハート）。
- 一、意識をもち、同一性の自覚をもち、目的とか計画をもち、情緒的な反応をし、苦痛や不安を覚え、フラレーションを体験し、理性をもち他人と意思疎通ができことが人間である（ファインパーク）。
- 一、パーソンであると言うことは、その者が生きるための道徳権利をもっていることと同義である。

これは一例であるが、人間というとき、どのバイオエシストもパーソンや理性を入れているのである。バイオエシストは人間の定義にパーソンを入れて、道徳的行為をできることを人間の本来のあり方であると主張する。したがって、バイオエシストたちは〈生命の尊厳〉を主張するよりは〈人間の質〉の方を重要していると言えよう。妊娠中絶の問題も結局は〈人間の質〉が問題になっているのである。妊娠中絶擁護の立場は人間をパーソンとして捉えるパーソン論になっている。このパーソン論は西欧人の伝統的捉え方に立っている。その意味で〈人間とは何か〉という問いは、西欧的な問いであり、それに答える答え方も西欧的である。（続く）。